

## 特集：『子ども参画のまちづくりと総合的学習』

### 特集の編集にあたって

都市計画学会ではかねてより都市計画教育委員会の活動を行ってきた（過去の機関紙 116号「まちづくりのための教育と学習」、118号「都市計画教育—その望ましい姿を求めて」、202号「子どもとまちづくり」など）。2002年度から本格的に学校教育のカリキュラムの編成に総合的学習が導入され、その中で地域を舞台とした環境に関わる総合的学習への期待も高く、都市計画教育の子どもたちへの実践と理論の構築も必要とされている。考えてみれば我が国の都市計画の父とも言われる石川栄耀は晩年、子ども向けに「都市計画の話」を語っていた。今日の市民参加のまちづくりの隆盛の中で子ども参加の活動がいくつか生まれてきている。また、子どもの権利条約の関連で、子どもの参画のありかたも議論され、条例を整備する自治体も生まれてきている。

そこでこの特集では、新たな世紀の子どもたちへの都市計画教育のあり方を理論と実践で示したい。

（特集担当：木下 勇）

## 都市計画の課題と街づくり教育

小澤一郎

都市基盤整備公団



都市計画は、今大きな転機に立たされている。

例えば、「公民協働の街づくりや提案型街づくり」に代表される新たな計画手法への対応であり、また、「都市再生」における「経済再生・社会再生」も組み込んだ新たな事業構築手法や実施手法への対応などである。

すなわち、「新たな合意形成手法を含むプロセスプランニングの確立」と「総合性の構築」が喫緊の課

題となっているといえよう。

これらは、多様な視点と多様な価値観を、「よりよい都市を創り上げる」という目標に向けてまとめ上げる方策であり、「そのプロセスや結果において、街づくりに参画する主体、協働する多くの分野にもよりよい成果がもたらされる」ということを見える「カタチ」にするための構想力・計画力である。

これらの実現にあたっては、都市計画に参画し、行動する多くの人達の知恵の結集を図ることが不可欠である。また、都市計画分野における「学問」と「実務」の新たな融合や、関連分野の「学問・実務」との融合を積極的に図ることが重要である。

こうした中で、「街づくり教育」は、「プロセスプランニングの確立」のためにも、また、「総合性の構

築」のためにも、重要な役割を果たすものといえる。

すなわち、「街づくり教育」は、都市計画に新たに参画をする人達に、その人達の「視点や関心」、「やろうとしている事、やりたい事」とどう関係するのかをわかりやすく理解してもらうためのものであり、その目標を達成するためには、「都市計画のプロセ

ス」と「都市計画の総合性」が明示され、伝達されなければならないからである。

「総合的な学習」の場で多様な街づくり教育の実践がなされることは、都市計画全体にとっても大きな意義をもつものであり、都市計画学会も積極的に対応することが期待されているといえよう。

## 学校カリキュラムの変化から都市計画学会に求められる課題

小澤紀美子

東京学芸大学

持続可能な地域づくりをめざすためには、まちづくり教育・学習の推進によって意識変革、「市民力」（市民性）を育てていくことが重要な課題である。

まちづくり教育とは、自然や環境が人類に与えている計り知れない恵みに対する想像力を養い、まち（環境）に対する sense of place を育み、さらに我々のさまざまな活動がまち（環境）にどのような影響を与えているか、また、そのことが現在や将来の自分たちの生活にどのような影響を及ぼすかなど、人間とまち（環境）との「かかわり」「つながり」の相互作用についての認識を深め、実際に社会の変革のために行動していくことのできる市民力とも言うべき能力や態度をもつ市民性を育てていくことである。

つまり「市民力」とは、地域社会を含めた「まち」や社会を創り、それを維持したり、改善していく能力や資質をもつ人と定義したい。そのスキルは、問題解決能力、問題の原因や要因を学際的に調べる能力、必要なデータの計測や情報を入手できる能力、分析的能力や批判的に環境を評価する能力であり、自分の考えを表現できるコミュニケーション能力である。さらに育成されるべき態度としては、主体的思考や意欲、社会的態度、他人の信念や意見の尊重と寛容さ、事実に基づく合理的な議論を尊重する態度である。

2002年から学校において創設される「総合的な学習の時間」はまさに上記の能力や態度の育成を目指すものであり、小・中・高校では様々な取り組みが

行われている。既に移行期間でその実施は行われている。その時間の支援を申し出る組織や専門家も多く、学校現場でもゲストティーチャーとして教室に招いたり、一過性のイベント等にかかわる地域の人も多くなってきている。

しかし「総合的な学習の時間」では、単なる体験や活動では終わらせないこと、科学的で知性的な追求を伴うプロセス学習（例えば、関心の喚起＜気づき＞→理解の深化＜調べる＞→思考・洞察＜考える＞→実践＜変わる・変える＞といった流れをスパイラルにたどり子どもが自己の課題を主体的に追求するプロセス）を重視すること、教科と総合的な学習の時間を分断しないこととされている。実践している学校では、校内研修として教師が連携し、学習環境のデザインも含めてカリキュラムづくりを日夜行っている。そして保護者や地域社会の人々と協働していく姿勢で取り組んでいる。



区立某小学校の「クリーン大作戦」（23時間）という「総合的な学習の時間」の1コマ。1ヶ月前に畑に埋めたゴミがどうなっているか掘り出している子どもたち

一方、現代の子どもたちは、効率性重視や分割断片化された状況の中で感性がゆがめられてきている。さらに

- ・自然体験や生活体験、社会体験が乏しく想像力が衰退し、現実からの発想がもちづらい・歴史や文化に対する理解が不足し、未来に対する不安が強く、未来へのビジョンを共有し創造していく力が弱い
- ・結果のみ重視する知識伝達型の学びになれ、思考プロセスを大切に、思考力や判断力を育てる間



自分の埋めたゴミの変化について発表。この授業は区のリサイクル協会の方の支援によって創られている。



ゴミの分解状態を拡大鏡を使って観察。

題解決型学習に不慣れで、オルタナティブの発想に欠ける

- ・分析的能力が弱く批判的な見方を避けるなどの状況にある。

こうした課題に対応していくためにも専門家は教師や学校の教育目標を尊重し、教師の地域理解や知識獲得を支援し、学校のカリキュラムづくりや子どもたちの学習プロセス協働していくことが求められているといえよう。

## 総合的学習とまちづくりー学校教育からの実践例/地域からの実践例

### 事例 1) 総合的学習としての「まち学習」の可能性

北原啓司

弘前大学

#### 1. はじめに

総合的な学習への取り組みとして、「景観」や「まち」をテーマにする学校は確実に存在している。もちろん、担当する教師が、それを意識しながら授業を進めているかどうかは別としても、明らかに、「まちづくり」の領域に関わる総合的な学習が各地でスタートしている。ところで、なぜ、現場の教師たちがそれを「まちづくり」に関わる授業であると意識できないのか。そのあたりから、我が国の「まち」学習の現実的な限界と、総合的な学習における豊かな可能性を、いくつかの事例を紹介しながら論じてみたい。

#### 2. 「まち」の何を教えるのか

何度か現場の教師たちに私が試みたアンケート調査からは、都市計画や建築に関する専門的な知識が

教師自身に無いために、学習の対象として選択しにくいという回答が得られている。文字通り、まちをつくるための「まちづくり学習」という解釈であれば、そのような不安も理解できる。しかし、今まちづくりで必要とされる学習は、まちを「たべる」楽しさを育む学習ではないだろうか。そう言う意味で、私は敢えて、それを「まちづくり学習」ではなく、ここ数年、木下勇や寺本潔らと展開している「まち学習」と称したい。

その典型的な事例が、英国でアイリーン・アダムスらによって展開されている、フロント・ドア・プロジェクトであり、<Good, Bad & Ugly>というチェックシートを用いたフィールド調査であろう。それらは、線引きという言葉を教えるための教育では明らかにない。まちと関わる子供たちの独自の視点や姿勢を育てていくものである。



good, bad and ugly

### 3. 総合的な学習がもつ豊かな可能性

子供たちと進めていく「まち学習」は言ってみれば発見的方法である。街を歩き、人と会って話を聞きながら＜見つける＞。次に、そこで興味を持った事象をもっと詳しく＜調べる＞。そして調べたものを街に活かすための方法を＜考える＞。最後に、街に提案できるように＜創造する＞。まさに、この一連のプロセスは、文部省教育課程審議会が3年前に出した総合的な学習の狙いと、見事に合致していると言わざるを得ない。

私が授業に関係させていただいた青森県中津軽郡西目屋村立砂子瀬小学校のプロジェクト「ふるさとの宝物」は、そのような「まち学習」の意味が、極

めて明快に見えてくる。ダム建設工事によって水没を余儀なくされる地域において、それを「まちづくり学習」と命名するには若干の無理がある。数年後に水没する自分たちの村を、あくまでもコンテンポラリーに観察評価していく学習の根底には、新しい居住地でのまちづくりにつながる発見を重視するというスタンスが潜んでいる。

まちを失うことになる地域で進める、「まちづくり」の学習。それこそが、総合的な学習に求められる「生きる力」にも通じる考え方であったように思う。



地元の砂子瀬小学校の総合的な学習の発表風景

## 総合的な学習とまちづくりー学校教育からの実践例/地域からの実践例 事例2) 中学校におけるまちづくり学習

中川義英

早稲田大学

### 1. 「まちづくり学習」実践の背景・目的

早稲田大学土木工学科都市計画研究室では、地域に隔たりなく存在する教育施設であり、手法によってはそこでの活動が地域に影響を与える可能性を持つ学校教育を通じた長期的視点に立った「まちづくり人材育成」を検討しています。実践的な場としては東京都東村山第七中学校の教師とともに、大学院生が中心となった「まちづくり学習」の企画、研究的授業を実施しています。

一方、小学校・中学校における「生きる力」、「考える力」を育む教育として、2002年度より「総合的な学習の時間」が本格的に導入されますが、その具体的な内容は各学校に任されており、学校側もその題

材を模索している状態です。この題材として「まち・まちづくり」について考えることも今後は重要な選択肢の一部になると考えています。

小学校では地域学習や、自治体や大学研究者等によるイベント等の実践例が幾つもあり、現在も試行活動が行われています。しかし中学校においては事例がほとんどなく、また第三者が介入し、実践することが難しい現状もあります。中学校では地域・まちに対して教科の中で学ぶ機会がほとんどない状態で、中学生の活動範囲は広がり、社会へと出て行くことで、小学校での地域学習によるまちへの興味は途切れてしまいがちな状況です。日本における「まちづくり学習」のあり方を考える上で、中学校での

あり方が大きな鍵になると考え、中学校におけるまちづくり学習のプロジェクトを展開しています。

## 2. これまでの活動内容（東村山第七中学校）

1999年度には3年生選択美術において年間32時間の授業を実施してきました。授業結果は学校内の展覧会で報告するとともに、生徒の計画内容が東村山市の都市マスタープランの一部に反映されました。2000年度は1年生必修美術において年間16時間の授業を実施し、前年同様、展覧会で報告しました。

2001年度は二種類の授業内容を展開しています。一つ目は、1年生複数授業連携枠において年間約10時間程の授業を実施中です。この活動状況については、東村山市のふるさと歴史館での展示会を実施しました。また、二つ目は2年生選択美術枠において年間約20時間程の授業を「バリアフリー」をテーマとして実施中です。これらは主に次の観点に立ちまちづくり学習を展開しています。

- 1) 総合的学習を見据えた学習内容、及び実施体制の検討
- 2) 教員の方々、生徒の「まちづくり学習」理解の促進
- 3) 「まちづくり学習」を通しての地域の方々への情報発信

## 3. 2001年度の授業内容

1年生の全員を対象としたまちづくり学習は社会、理科、国語、数学、美術の時間の一部を使っています。その内容は以下のように進めています。

「社会科」では、「地図の見方、世界の国名」など学んだ事を活かし、まちの役割、まちにある物や、現在の東村山のまちについて理解を深める、ことを実践しました。「理科」では、「自然環境、特に緑」を対象として、自分達の視点から、今のまちを良くするために必要な事を考えてもらいました。「国語

科」では、「文章表現、発表」などをとおして、自分の体験から、今のまちを良くするために必要な事を考え、様々な人々の視点から、今のまちを良くするために必要な事を考えてもらいました。「数学科」では、「縮尺の計算、平面図と空間図」などを解ってもらうことを狙いとして、まちのスケール、配置について考えてもらいました。最後の「美術科」では、「造形、色彩」などを身につけてもらうため、これまで考えたまちを模型として表現してもらいます。

## 4. 授業展開上の課題

これらの授業を通して、いかにして生徒の集中力や関心を高めることができるのか、生徒にまちの様子については関心を持ってもらうにはどうすればよいか、発言・考えに対する自信を与える事も生徒の思考を伸ばす為には重要であること、など多くの課題も出てきている。また、グループ作業後に全体での確認作業を行い自分の考えだけではなく他の友達のを共有することが重要だが、一方的なアイデアになりやすいこと、アウトプット（歴史館での展示など）を示すことにより作品へ取り組む姿勢や授業に対する態度が変わること、生徒の興味や反応により、授業内容の変更も含め臨機応変に対応していく必要があること、など教師、サポーターの役割に関わることについても検討を進めています。

また、市教育委員会の方々、七中の先生方による研究授業（授業視察）が実施されたときには、複数の先生方にも参加してもらい、生徒各自の疑問点について何を調べたらよいか、その調べ方を生徒に考えてもらう質問してもらいました。その際、サポーターには生徒の先生方への質問を促すため、「それだけで解決するのか？もっと考えなければいけないことはないか？」、「どの内容の質問を誰に質問すればよいか？」等の生徒への問いかけをしてきています。

1.まちについての認識を与える学習  
2.自分の住むまちを見つめる学習  
(社会科との連携学習：1学期)



- ・世界のまちの様子をスライドを用いて紹介
- ・現在のまちの良い所、悪い所を点検マップにまとめる

学習のねらい（総合的学習として）  
・身近なまちに対する理解を深め、現在のまちにどんな問題があるか考える

学習のねらい（社会科として）  
・社会科で学んだ事を活かし、応用をはかる  
(世界の国々のまち、地図の見方、地域学習)

3.まちの計画づくり学習①  
4.問題提起となるヒントを与える  
(理科との連携学習：2学期)

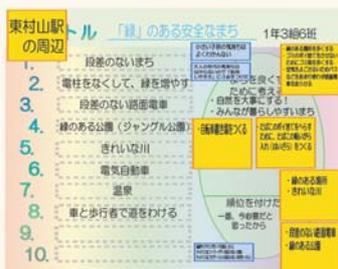


- ・市内で対象場所を選び、その場所での問題点を解決する為にグループで話し合う。
- ・まちでの自然環境（特に緑）の役割について考える

学習のねらい（総合的学習として）  
・まちの問題点を解決するためにどうしたらよいか考え、将来のまちの計画づくりを行う

学習のねらい（理科として）  
・理科で学んだ事を活かし、応用をはかる  
(自然環境：動物、植物<緑>について)

5.まちの計画づくり学習②  
(国語科との連携学習：2学期)



- ・まちでの自分の体験を作文にし、その体験からまちを良くするためにどうしたらよいか発表。その後、まちの計画案をまとめる。

将来のまちの計画案

学習のねらい（総合的学習として）  
・まちの問題点の解決方法を基に、自らより詳しく調べ、将来のまちの計画づくりへ活かす

学習のねらい（国語科として）  
・国語科で学んだ事を活かし、応用をはかる  
(考える、話す、書く、聞く、読む等の力)

5.まちの計画づくり学習②  
(数学科との連携学習：2学期)



- ・まちの様々な物を自分の足の歩幅で測り、実際の長さへの換算を行う。
- ・まちのスケール（距離感、大きさ）、平面図と立体図の関係を考え、模型作りへ向けたまちの配置を考える。

学習のねらい（総合的学習として）  
・まちの問題点の解決方法を基に、自らより詳しく調べ、将来のまちの計画づくりへ活かす

学習のねらい（数学科として）  
・数学科で学んだ事を活かし、応用をはかる  
(計算力、縮尺、図形：平面図と立体の認識)

6.計画したまちを形にする学習  
(美術科との連携学習：3学期)



- ・計画したまちを模型（又は絵地図）として表現する

学習のねらい（総合的学習として）  
・まちの計画づくり（問題解決の為に考える過程）を通して発見したことを形に表現する

学習のねらい（数学科として）  
・美術科で学んだ事を活かし、応用をはかる  
(造型や色彩などの表現力・想像力)

授業作品を展示会にて紹介



「まちづくり学習」展示会  
—東村山市ふるさと歴史館—



模型作品例

## 総合的学習とまちづくりー学校教育からの実践例/地域からの実践例 事例 3) 善福寺川流域での取り組み

山田 清

人イエまちネットワーク／おぎくぼ塾

2002年度からの「総合的な学習の時間」の正式導入に向けて、各地でさまざまな試みが行われている。それらの多くは試行錯誤の段階にあり、地域との連携が強く求められている。ここでは地域と学校の協力による授業の取り組み事例を紹介する。

東京都杉並区の中央を蛇行しながら東西に流れる善福寺川がある。この流域は上流部は市街地を流れているが、下流部は公園・緑地に囲まれた自然度の高い地域となっている。この下流部に松ノ木小学校があり、現在私たちは地域の人材として4年生と5年生の授業のサポートを行っている。

4年生は川探検がテーマで、子どもの関心の所在をもとに7つのグループに分かれての取り組みである。川での調査では各グループに対応する専門性を持った地域サポーター7人と全体で10人の保護者の協力によって進められている。調べる項目やその方法、グループでの役割などは子どもたちの提案をもとに教室内での計画作成のあと、目的を達成できる

かを確認するために予備調査を行った。調査ポイントや時間配分に検討すべき点があったが本調査ではそれを活かすことができ、おおむね目標を達成することができた。

5年生は身近な環境をテーマとしているが、2クラス49名で全員の意向を聞いた結果、多岐にわたるため、「身近」の議論からはじめ、実効性のある行動計画にするための提言を学年の共同プログラムとして行う方向で検討されている。これは2002年1月開催の杉並教育フォーラムにおいて区長への提言書提出として予定されている。

これらは地域の人材である私たちとクラスの運営者である教員とで事前の打ち合わせを十分にを行い、「子どもたち自身の気づき」を引き出すものとしてプログラムされた。目的は学習の内容を充実させるほか、新たに学校と地域の関係性を創り出すことで子どもを社会の一員として位置付け、実態的まちづくりへの展開を主たる意図としている。



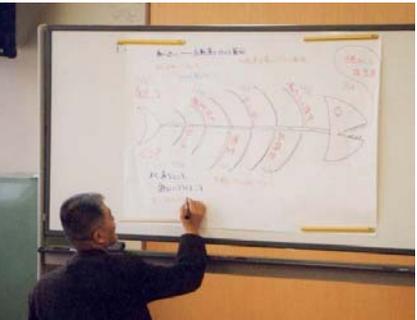
4年生の川探検  
調べたことをまとめているところ。大人は地域サポーター及び保護者



4年生の川探検



5年生2回目  
身近な環境がどうなってほしいか、糸玉を渡しながら一人一人の思いを述べているところ



5年生の最初の取り組みの絵を描いて出発点と到達点を常に意識できる様にしました。

5年生2回目  
一人一人の思いを記入したポストイットの整理をしているところ。中央の大人は地域サポーター  
(東京都環境学習リーダー)

# 総合的学習とまちづくりー学校教育からの実践例/地域からの実践例

## 事例 4) 近代化産業遺産を生かしたまち学習

曲田 清維

愛媛大学教育学部

### はじめに

「<http://www.niihamaminami-h.kss.ed.jp/akagane/>」にアクセスすると「ようこそ あかがねの里 別子銅山へ」のタイトルとともに、日本の近代化を支えた住友の銅工業の歴史と新居浜・別子のまちの変遷が盛り沢山に繰り広げら



れる。愛媛県立新居浜南高校の生徒達によるこの Web ページ上のタウントレイルを、楽しいまち学習として紹介していこう。

### 1. 学校・地域・行政の協働によるホームページづくり

学校紹介のホームページづくりに勤んでいた1999年のこと、地域案内に関連して学校周辺の住友関連遺跡や別子銅山記念館、銅山ゆかりの寺院の存在から、近代化産業遺産を中心にした地域の歴史とまちの変遷を大々的に取り上げるようになった。

情報科学部員総出で、別子山村や銅山峰、とうなる東平などの産業遺跡に休日を利用して幾度も出かけ、資料の発掘と収集に努めた。また、別子銅山記念館館長を迎えての学習会や、嘗て鉱山で働いていた人々へのインタビューによる貴重な体験談の収集、行政の丁寧な情報提供も加わり、豊富な内容とパノラマ風景を満喫できるものに仕上がっていった。



### 2. ホームページで新居浜近代化産業遺産トレイル

ホームページにアクセスすると、動画の歓喜坑(銅山の坑口)が見る人を招き入れる。案内図のチェックポイントをクリックすると、100年前の小学校や劇場、接待館の跡など、山々に挟まれた急傾斜地に、当時1万数千人の人々が暮らしていたとは思えない光景がそここに広がる。加えて、生徒らの目と耳と足で積み上げられた取材日記には、新鮮な驚きと感想が散りばめられている。

2000年には東平での鉱山生活が加わり、さらに充実した。オルゴールの音を背景に、モノクロ動画が繰り出す鉱山労働者の暮らしは、苦しくも助け合い



の中での豊かさが、人々の語りともによく映し出される。どの光景も臨場感に溢れ、見る人の目と心を捉えて離さない。

### 3. インターネットのまち学習で多彩な連携

「あかがねの里」へのアクセスは海外も含め約8000件を数えている。その成果の第1はダイレクトに、学校から全世界へとまちづくり情報を発信できること、第2に双方向の交流が可能で、輪が広がりやすいこと、第3に電腦空間は想像以上にリアルで楽しく表現できることである。もちろん、生徒らの遺産調査やヒアリング、さらには地域の人々や行政



との協働学習も大きな成果である。

東洋のアイアンブリッジ峡谷博物館を目指しつつある新居浜市当局とともに、2001 年末の「四阪島の

紹介」作成を目標に、子どもらを中心にさらに連携の輪が広がろうとしている。

## 子どもの主体的参画を促す都市計画教育へ

木下 勇

千葉大学



近代都市計画の父、環境学習の父と言われる

Patrick Geddes(1854-1932)

は1世紀近くも前に Urban Study を実践し、エジンバラの展望塔にその成果を展示し、大人のみならず子

どもたちにも都市を学ぶ手だてを考えた。それは英国で後に市民参加のうねりとなった 1960 年代後半から 70 年代に Town & Country Planning Association の教育ユニットの設立と Built Environment の環境学習機関誌 BEE の発行や、Street work の展開、Urban Design Center の設立へと展開していった。

Skeffington Report(1969)のように計画制度の変更に伴う市民参画の促進への契機というものは、わが国の場合に持ち合わせていないが、あえて言えば 1980 年の都市計画法、建築基準法改正の地区計画制度の導入であろう。先行して神戸市真野地区では住民主導型のまちづくりが公害反対運動や福祉のまちづくり運動、そして居住環境改善運動へと展開していたが、関東で地区計画制度導入を意図して住民参加のまちづくりが展開した最初の例が世田谷区の太子堂 2・3 丁目まちづくりである。ここでは英国の Street work のような活動をする任意団体が専門家や住民によって組織され、子ども参加のさまざまな活動が展開されてきた。

そののち市民参加のまちづくりは各地で広がりを見せ、そういった中で本特集にもいくつかの事例で紹介されているように、子どもたちの参加の様々な試みも実践されてきた。また、子どもの権利条約批

准に伴う第 12、13 条の意見表明権や表現の自由の条項の推進、および 2002 年度からの学校教育カリキュラムの改変に伴う総合的学習の導入がまたその追い風となっている。

子どもの参加というと、都市計画の複雑なことから子どもの理解を超えているので無理ではないか、また現実世界は不条理に満ちているので、子どもをまきこむのは悪影響を与えるのではないか、さらに大人の住民参加も不十分なのに子どもの参加など無意味ではないか、などの意見がよく聞かれる。都市計画の制度が子どものみならず一般市民にも分かり難く、都市計画手続きをどのように公開していくか、関係者の利害関係の対立をいかに克服するか、圧倒的多数の無関心層をどのように引き込むかなど、市民参加にはまだまだ多くの課題がある。そして地域社会では環境問題、少子高齢化、コミュニティ崩壊と防犯防災機能低下など様々な問題を抱える。

社会の複雑な課題への対処が我々大人だけでは無理ならば時間をかけて次の世代の子どもらにたくそうではないか、と考えてもよい。そのプロセスに大人が一所懸命に取り組む姿を子どもに見せるような子どもと大人がともに参加する場面こそが必要ではないだろうか。

例えば、世田谷区のまちづくりの場面では子どもたちと大人たちが地域を点検して発表しあった時には、今まで地域の問題ばかりに気をとられて否定的にとらえていた大人が子どもの感性でとらえた地域の良き面を教わったということがある。これは本特集で北原が事例で報告するように「発見する楽しさ」を大人と子どもで共有する場となる。また他地域で

はささいなことで対立していた大人たちが子どもを前にしてこんなことで争っていても「大人げない」と合意形成に働いたという例がみられる。

ではどのように子ども参加を考えたらよいのだろうか。Roger Hart はユニセフの依頼で世界中の子どもの参加の事例を調べて、子どもが意思決定にまで関わりコミュニティに影響を与えている例も報告している。また Decoration, Tokenism, Manipulation といった表面的な子どもの参加の弊害にも警鐘をならしている。たしかに子どもの参加といっても多くの大人は子どもに語る言葉を持たず、子どもを参加させたとしても「子ども自らの意志で参加し、判断しているのか」と考えれば、不安になることこの上ない。誘導することも不可能ではないが、子どもが諸々の情報をどのように解釈し判断するかという一連のプロセスを提供するには、やはり子どもの心の動きを押し量ることのできる専門性が必要となる。子どもの参加を考えるフォーラムで次のような発言をした子どもがいた。「ぼくらの遊び場に来る大人はいろいろだけれど、ちょっとちょっかいだしては反応を見るんだ。それによって適当につきあうか、心を開くか判断する」。

まちづくり学習においては都市計画の専門家が教育や心理学など子どもの発達段階の特性を熟知し、子どもの内面の心の動きを読むことのできる専門家と協働して進めることも必要である。総合的学習にまちづくり学習を重ねることはまさにそういったコラボレーションが求められる。都市計画学会でも TCPA の教育ユニットのような何らかのまちづくり学習の支援システムを考えていく必要がある。地域に出るの調べ学習は、調査、資源や課題発見、そして問題解決への自分たちでできることの計画といった一連のプロセスとなることで、単なる今までの一方向的な地域学習を超えてまちづくり学習へと展開する可能性をもつ。そのようなプロセスは時間もかかるが市民参加でも本来は必要なことであり、単なる公聴会で意見を言うだけというような参加とは異

TAISHIDO NEIGHBORHOOD IMPROVEMENT 1981-199



Watching tour with children 1982-1995



Children made theater from folktale



Participatory pocket park 1984-



Waterstream project, children's sympo1986



Green thumb group activities with children 1991-

なり、小澤が「市民力」というように市民の主體的な都市計画への参画能力を高めるものである。子どもにも、そのようなプロセスを用意すれば大人と遜色ない能力を発揮するものである。元美術教師の Eileen Adams はそのプロセスにおいて子どもの感性の働きを重視する。それこそが複雑なことがらよりも直観的に何がよいのかという判断力を高めることにもなり、思考面でも批判能力を高める基礎となるという。

我が国において政治経済の世界での不祥事続きという状態の中で、表と裏の世界と不条理さを成長期にまざまざと見せつけられている子どもたちが、大人に対して心を開かなくなるのは無理からぬことである。もっと直線的な感受性に基づく正論が物を言う社会づくりへの変革が必要とされる時代において、地域のまちづくりを舞台として子どもらとともに大人が協働する時代が来ている。

- 発行日：2002年7月
- 編集発行：
  - 社団法人 日本都市計画学会 国際委員会
  - 〒102-00082 千代田区一番町 10
  - 一番町ウエストビル 6F
  - TEL. 03-3261-5407/ FAX. 03-3261-1874